

1歳6か月児をもつ父親の父親としての自己評価に関連する要因

岡 本 絹 子^{*1}

はじめに

働く母親の増加，核家族化の進展等から，父親への育児参加が求められている．母親にとって最も身近な存在は父親であり，父親への育児参加に対する期待は大きい．父親には労働者，父親，夫として多くの役割が課せられており，その現実の中で父親は育児に参加しているのである．父親の育児参加に関しては，父親自身が抱えている育児参加のあり方と実際の父親の姿との間に大きなギャップが生じていることを報告した¹⁾．そのような状況の中で父親自身は父親としての自分をどのように評価しているのであろうか．

育児中の親の自己評価に関しては，母親を調査対象として母親自身の自己評価と育児のパートナーである父親の評価を尋ねたもの²⁾や育児実態に関する調査の中で父親の自己評価を両親双方に尋ねたもの^{3,4)}はあるが，父親の自己評価を中心に報告されたものはほとんどない．自分で自分をどのように評価するのかは，生活のあらゆる面で考え方や行動に大きな影響を与える⁵⁾．自己評価の低い者ほど不安が大きく，役割を当然のものとする圧力が大きいと指摘されており⁶⁾，父親としての自分に対する見方や判断は育児や仕事への取り組み，妻との関係，また心の平衡にも大きく関係していく．父親自身の自己評価は父親の心身の在り方に大きな影響を与えるのであり，父親の自己評価を高める要因の検討は育児支援に重要な示唆を与えてくれると考える．

そこで今回，父親としての自己評価と父親の育児に関する意識や育児参加を中心とした生活状況との関連を検討した．

研究方法

1．調査対象および方法

平成16年3月にA保健所が実施した1歳6か月児健康診査(以下健診と略す)対象児の父親に質問紙

調査を実施した．健診の問診票郵送時に調査票を同封して配布した．健診来所時に調査票を持参してもらい，健診会場にて回収した．対象数は368人，回収数は217人(回収率59.0%)であった．このうち自己評価得点未記入を除外した210人を分析の対象とした(有効回答率57.1%)．

なお，得られたデータは研究の目的以外に使用しないこと，調査への回答は自由意志であること，調査票は無記名で回収し個人は特定されないことなどを文書にて説明し，健診会場への調査票の持参をもって研究協力の受諾とした．

2．調査項目

調査内容は，父親の属性(年齢，職種，子供の数，家族構成等)，父親としての自己評価，抑うつ症状，父親の育児参加に関する状況(育児項目別の参加の有無，育児への参加時間および妻との会話時間，育児への参加に対する認識等)，父親の日常生活でのストレスの有無である．

父親としての自己評価は，100点満点中で父親としての評価を自己採点してもらった(以下自己評価得点という)．

抑うつ症状の測定には Zung 自己評価式抑うつ尺度(SDS)を用いた．これは20項目の抑うつ症状に対する4段階の回答を重い順に4～1点で得点化したもので，合計点を抑うつ得点とした(20～80点)．Zung 自己評価式抑うつ尺度はうつ病の重症度評価のために開発されたものであるが，健康集団の精神的健康を測定する指標としても有効とされ，得点が高いほど抑うつ症状が強いと判断される⁷⁾．なお，抑うつ得点は，多くの研究で20～39点を正常，40～47点を抑うつ軽度，48～55点を抑うつ中等度，56点以上を抑うつ重度と判定しているが⁷⁻¹⁰⁾，本研究においても抑うつ状態をこの4段階で検討した．

育児項目別の父親の育児参加に関しては，「子供の遊び」，「入浴の世話」，「排泄の世話」，「寝かせ

*1 吉備国際大学 保健科学部 看護学科
(連絡先)岡本絹子 〒716-8508 高梁市伊賀町8 吉備国際大学

つけ」,「着替えの世話」の6項目について実施の有無を尋ねた。

育児への参加に対する認識は,「育児にかかわる時間」,「育児に対する熱意」について,「十分」,「まあ十分」,「やや不十分」,「不十分」の4段階で回答を求めた。

日常生活でのストレスの有無は,矢澤らの日頃父親が感じるストレスについての質問項目を用いた¹¹⁾。これは,「仕事の遂行」,「自分の時間の不足」,「育児の実施」,「親としての自信不足」等の10項目について,ストレスが「よくある」,「時々ある」,「たまにある」,「ほとんどない」の4段階で回答を求めたものである。

3. 分析方法

自己評価得点は平均値61.5±23.6点,中央値60点であったため,61点以上を高群(104人,49.5%),60点以下を低群(106人,50.5%)として2群に分け,父親の育児や生活の状況との関係の分析をχ²検定により行った。データ解析にはSPSS(Ver.11.5)を用いた。

結 果

1. 調査対象者の属性

父親の平均年齢は31.6±4.9歳で,父親の職業は「会社員」が164人(78.1%)と多く,自営業は19人(9.0%),公務員は16人(7.6%)であった。家族構成は「核家族」が177人(84.3%),複合家族が33人(15.7%),子供の数の平均は1.6±0.7人,妻の平均年齢は30.4±4.1歳であった。

2. 父親の状況と自己評価得点

2.1. 父親の抑うつ症状の程度と自己評価得点

抑うつ症状についてみると,抑うつ軽度は79人(37.6%),抑うつ中等度は25人(11.9%),抑うつ重度は3人(1.4%)であり,軽度以上の父親は107人(50.9%)と半数を超えていた。抑うつ得点が39点以下の「正常」の父親では高群が65人(63.1%)と,逆に40点以上の父親では低群が68人(63.6%)と多く,有意な差があった(p<.001)。(表1)

表1 自己評価得点別にみた父親の抑うつ症状

| | n=210 | | | 検定 |
|-------|-------|--------------|----------|-----|
| | 合計 | 自己評価得点 高群 | 低群 | |
| 抑うつ得点 | | | | |
| 39点以下 | 103 | 65(63.1) | 38(36.9) | *** |
| 40点以上 | 79 | 39(36.4) | 68(63.6) | |

注) ***P<.001

2.2. 父親の生活時間と自己評価得点

父親が子供とかかわる時間についてみると,「1人で子供の相手をする」時間は,平日,休日ともに「1時間~4時間未満」が112人(54.4%),128人(65.0%)と多く,それに次いで多かったのは平日では「30分~1時間未満」45人(21.8%),休日では「4時間以上」42人(21.3%)であった。「誰かと一緒に子供の相手をする時間」は,平日では「1時間~4時間未満」が122人(59.8%),休日では「4時間以上」が125人(67.2%)と多かった。「夫婦で会話する時間」は,平日,休日ともに「1時間~4時間未満」が135人(65.9%),105人(54.1%)と多く,それに次いで多かったのは平日「30分~1時間未満」32人(15.6%),休日「4時間以上」78人(40.2%)であった。

父親の生活時間を「1時間以上」と「1時間以下」の2群にわけて,自己評価得点別にみると,「平日に誰かと子供の相手をする時間」は「1時間未満」では低群が35人(66.0%)と有意に多くなっていた(p<.05)。「平日に1人で子供の相手をする時間」も「1時間未満」に低群が多い傾向がみられた。「平日に夫婦で会話する時間」も「1時間未満」では低群が31人(66.0%)と有意に多くなっていた(p<.05)。「休日に夫婦で会話する時間」においても「1時間未満」が低群が多い傾向であった。(表2)

表2 自己評価得点別にみた父親の生活時間

| | 人(%) n=210 | | | 検定 |
|------------------|------------|--------------|----------|----|
| | 合計 | 自己評価得点 高群 | 低群 | |
| 平日に1人で子供の相手をする時間 | | | | |
| 1時間以上 | 117 | 64(54.7) | 53(45.3) | # |
| 1時間未満 | 89 | 37(41.6) | 52(58.4) | |
| 休日に1人で子供の相手をする時間 | | | | |
| 1時間以上 | 170 | 83(48.8) | 87(51.2) | ns |
| 1時間未満 | 27 | 13(48.1) | 14(51.9) | |
| 平日に誰かと子供の相手をする時間 | | | | |
| 1時間以上 | 151 | 82(54.3) | 69(45.7) | * |
| 1時間未満 | 53 | 18(34.0) | 35(66.0) | |
| 休日に誰かと子供の相手をする時間 | | | | |
| 1時間以上 | 175 | 85(48.6) | 90(51.4) | ns |
| 1時間未満 | 11 | 4(36.4) | 7(63.6) | |
| 平日に夫婦で会話する時間 | | | | |
| 1時間以上 | 158 | 84(53.2) | 74(46.8) | * |
| 1時間未満 | 47 | 16(34.0) | 31(66.0) | |
| 休日に夫婦で会話する時間 | | | | |
| 1時間以上 | 183 | 82(44.1) | 91(49.7) | # |
| 1時間未満 | 11 | 2(18.2) | 9(81.8) | |

注1) 不明除く

注2) #p<.1 *p<.05

2.3. 父親の育児参加と自己評価得点

育児項目別にみた父親の育児参加では,すべての項目で育児参加している父親は高群の方に有意に多

くなっていた (p<.01, p<.05).(表3)

表3 自己評価得点別にみた育児参加状況

| | 人(%) n=210 | | | 検定 |
|--------|------------|--------------|--------------|----|
| | 合計 | 自己評価得点 高群 | 自己評価得点 低群 | |
| 子供と遊ぶ | | | | |
| している | 177 | 96(54.2) | 81(45.8) | ** |
| していない | 33 | 8(24.2) | 25(75.8) | |
| 入浴の世話 | | | | |
| している | 175 | 93(53.1) | 82(46.9) | * |
| していない | 35 | 11(31.4) | 24(68.6) | |
| 排泄の世話 | | | | |
| している | 96 | 58(60.4) | 38(39.6) | ** |
| していない | 114 | 46(40.4) | 68(59.6) | |
| 寝かせつけ | | | | |
| している | 66 | 42(63.6) | 24(36.4) | ** |
| していない | 144 | 62(43.1) | 82(56.9) | |
| 着替えの世話 | | | | |
| している | 95 | 57(60.0) | 38(40.0) | ** |
| していない | 115 | 47(40.9) | 68(59.1) | |

注) *p<.05 **p<.01

育児への認識についてみると、「育児にかかわる時間」は「やや不十分」・「不十分」と回答した父親が135人(64.6%)と、「育児に対する熱意」では逆に「十分」・「まあ十分」が129人(61.7%)と多かった。自己評価得点別にみると、ともに「十分」・「まあ十分」と回答した父親は高群が61人(82.4%),90人(69.8%)と、逆に「やや不十分」・「不十分」では低群が93人(68.9%),67人(83.8%)と多く、有意な差があった(p<.001)。

父親の育児と仕事へのかかわり方は、「育児と仕事に同じようにかかわるのがよい」が168人(80.8%)と、母親のかかわり方では「仕事より育児を優先させたほうがよい」が136人(66.0%)と多かった。自己評価得点別では有意な差はなかった。(表4)

2.4 父親の育児参加と自己評価得点

普段の生活でのストレスについてみると、「よくある」・「時々ある」の割合が高かった項目は「仕事に思うようにいかない」115人(54.8%),「自分の時間が持てない」103人(49.3%)であった。(図1)

ストレスの有無を「ほとんどない」と「よくある」・「時々ある」・「たまにある」の2群にわけて自己評価得点別にみると、「仕事に思うようにいかない」、「妻との会話が不足している」、「育児に思うようにいかない」、「親としての自信がない」において、「ほとんどない」が高群でそれぞれ22人(71.0%),64人(66.0%),55人(61.8%),73人(59.3%)と有意に多くなっていた(p<.05, p<.001, p<.01).(表5)

表4 自己評価得点別にみた育児への認識

| | 人(%) n=210 | | | 検定 |
|-----------|------------|--------------|--------------|-----|
| | 合計 | 自己評価得点 高群 | 自己評価得点 低群 | |
| 育児にかかわる時間 | | | | |
| 十分 | 74 | 61(82.4) | 13(17.6) | *** |
| 不十分 | 135 | 42(31.1) | 93(68.9) | |
| 育児に対する熱意 | | | | |
| 十分 | 129 | 90(69.8) | 39(30.2) | *** |
| 不十分 | 80 | 13(16.3) | 67(83.8) | |
| 父親の役割 | | | | |
| 仕事を優先 | 28 | 13(46.4) | 15(53.6) | |
| 育児・仕事を平等に | 168 | 83(49.4) | 85(50.6) | ns |
| 育児を優先 | 12 | 6(50.0) | 6(50.0) | |
| 母親の役割 | | | | |
| 育児・仕事を平等に | 70 | 34(48.6) | 36(51.4) | ns |
| 育児を優先 | 136 | 67(49.3) | 69(50.7) | |

注1)不明除く
注2)「十分」は「十分」と「まあ十分」を、「不十分」は「やや不十分」と「不十分」を合わせたもの
注3) ***p<.001

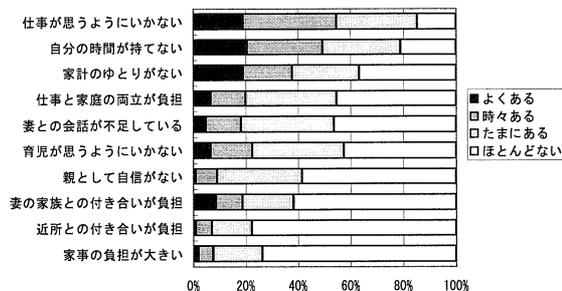


図1 日常生活でのストレスの有無

表5 自己評価得点別にみた日常生活上のストレスの有無

| | 人(%) n=210 | | | 検定 |
|--------------|------------|--------------|--------------|-----|
| | 合計 | 自己評価得点 高群 | 自己評価得点 低群 | |
| 仕事に思うようにいかない | | | | |
| ほとんどない | 31 | 22(71.0) | 9(29.0) | * |
| ある | 179 | 82(45.8) | 97(54.2) | |
| 妻との会話が不足している | | | | |
| ほとんどない | 97 | 64(66.0) | 33(34.0) | *** |
| ある | 112 | 40(35.7) | 72(64.3) | |
| 育児に思うようにいかない | | | | |
| ほとんどない | 89 | 55(61.8) | 34(38.2) | ** |
| ある | 120 | 49(40.8) | 71(59.2) | |
| 親としての自信がない | | | | |
| ほとんどない | 123 | 73(59.3) | 50(40.7) | ** |
| ある | 87 | 31(35.6) | 56(64.4) | |

注1)不明除く
注2)「ある」は「たまにある」、「時々ある」、「よくある」を合わせたもの
注3) *p<.05 **p<.01 ***p<.001
注4)有意差の認められた項目のみを表示

考 察

1. 父親の抑うつ症状と自己評価得点

Zung 自己評価式抑うつ尺度は、健康集団においても抑うつ状態を測定する妥当な尺度として幅広く用いられており、精神的健康状態の一指標と考えられている^{7,10)}。川上は抑うつ得点40点をカットオフ点として症状の有無を検討した場合に比較的高い妥当性が得られたと述べている⁷⁾。本調査の結果を見た場合51%の父親が抑うつ得点40点以上であり、また対象の子供の年齢が異なるので厳密な比較は困難ではあるが、育児中の母親を対象とした調査では同割合は36%と報告されており⁸⁾、本調査の父親は抑うつ症状のある者がやや多い傾向といえる。

父親の自己評価得点別にみると、40点以上の抑うつ症状のある父親の自己評価得点が60点以下である割合が有意に高くなっていた。自己評価が高ければ、比較的安定した気分で過ごし、物事を積極的に行ったり、困難にも勇気をもって立ち向かうことができ、反対に低ければ、不安を感じ、日常生活のなかでもうまくいかないことが多くなる⁵⁾。母親の自己評価を高めることが母親自身の精神の安定につながり、子供にとってよい環境を作り出すと指摘されているが²⁾、父親も同様に父親としての自分自身の評価を高めることが父親の大きな力となり、育児や仕事に立ち向かおうとする姿勢につながる。母親の抑うつ症状については多くの研究報告があるが^{8,9,12)}、今後は育児のパートナーである父親の抑うつ症状にも関心を向けて更なる検討をしていく必要があると考える。

2. 父親の育児参加の状況と自己評価得点

父親が育児にかかわる時間は1996年の報告では平日は平均10分であったが¹³⁾、本調査では平日に父親1人でかかわる場合「1時間～4時間未満」が半数を超えており、子供とのかかわりの時間は本調査のほうが長いと推察できる。また、休日では誰かとかかわる場合は「4時間以上」が最も多く、休日には子供と時間をとって過ごしている父親の様子が伺える。育児参加に肯定的な父親がほとんどであり、父親の育児に対する意識や実際の参加時間から父親の育児参加は進んでいるといえる。しかし、育児への認識についてみると、62%の父親は育児への熱意は「十分」・「まあ十分」と考えていたが、育児の時間を「十分」・「まあ十分」としている父親は35%と少なかった。父親は育児参加の現状に満足していないと思われる。

自己評価得点と父親の育児参加については、本調

査と同じく自己採点により自己評価の検討を行った報告において育児へのかかわりを不足と考えている父親ほど自己評価得点が低いと報告されている⁴⁾。本調査も同様に、子供との遊びや入浴の世話等の直接的な育児項目別にみた育児参加状況および子供とかかわる時間で有意な差が認められ、父親の育児参加状況と自己評価得点との関連が示唆された。しかし、子供とかかわる時間では休日との間では有意な差は認められなかった。仕事との両立で直接的にかかわる時間をとりにくい平日にどの程度子供とかかわりを持つかが父親自身の評価に関連していると考えられる。

父親の平日の育児参加を促進するためには父親自身の意識変革も必要であるが、同時に社会全体に対する働きかけも必要である。男性の育児参加を促す制度が整備され具体的な取り組みも見え始めてはいるが、まだ緒についたばかりである。制度の有無だけでなく、実際にその制度が利用できるかどうかの問題が職場にはあると指摘されている¹⁴⁾。父親が育児に参加し父親としての評価を高めるために、社会全体での取り組みを今後も推進していかなければならない。

3. 父親の生活上のストレスと自己評価得点

父親が日常生活で感じているストレスについてみると、「仕事」、「時間」の割合が高くなっていた。他の報告でも「育児に十分時間をかけられない」、「休みがとりにくい」が育児中の男性の問題点として上位にあげられており¹³⁾、本調査も同様の傾向といえる。育児期にあたる年齢層を中心に長時間労働者比率が増加している現実が存在する¹⁵⁾。父親には職業人、稼ぎ手、夫、父親と職場や家庭で果たすべき多くの役割がある。本調査でも父親の役割として育児に仕事と平等にかかわるべきと考える割合が81%を占めており、父親の育児参加意識は高まってきている。しかし、現実には日々の生活の中で仕事を優先せざるを得ない社会状況であり¹⁶⁾、本調査においても育児と仕事の両立に対するストレスがほとんどないと回答した父親の割合は45%と半数以下であった。このような状況下で時間的なゆとりに対するストレスが生じていると考える。抑うつ得点40点以上の父親が半数を超えていたこと、また自己評価得点と「仕事」に対するストレスとの間で有意な差がみられたことも合わせ、日常生活の中でストレスを感じながら生活している育児中の父親は決して少なくないという結果を考慮した父親への働きかけが必要と考える。

自己評価得点と生活時間の「夫婦での会話時間」、

またストレスに関する項目のうちの「妻との会話不足」との間で有意な差が認められた。会話の内容については調査していないので詳細は今後の検討課題であるが、育児へのかかわりに肯定的な父親がほとんどであり、育児のパートナーである母親との会話の内容には子供に関することも多いと思われる。その結果、夫婦での会話時間が父親としての評価に影響を及ぼしていると考えられる。平日の夫婦の会話時間が1時間未満の父親が23%にのぼっていた。身近な相談相手の不在、夫との会話不足といった状況下で母親は孤独な育児へと追い込まれていく。母親の精神的安定のために夫婦間での十分な会話が重要であることを報告した¹⁷⁾。一方父親にとっても主な情緒的サポート源は妻であることから¹⁸⁾、十分な会話を図っていくことは育児中の母親のみならず父親にとっても精神的安定のために重要である。妻との会話不足にストレスがほとんどないと回答した父親は半数弱であり、会話不足をストレスに感じている父親は多い。日本人は言葉で表現せずにお互いに察しあうという伝統を長く持ってきたため、夫婦の対話は最も困難な大事業だという指摘もある¹⁹⁾。育児中の夫婦は時間的に夫婦での会話がしづらい状況にある可能性が高く、意識して夫婦での対話を図っていくようにお互いに努力していく必要がある。夫婦の間で役割がうまく分担され、片方だけがいつも損な役割を押し付けられたりするのでなければ、夫婦の自己評価は高まると述べられている⁵⁾。親としての自己評価を高めるためには、夫婦間での会話を通し

た十分な意思疎通が重要と考える。

今回は、父親としての自己評価を自己採点という父親の主観的な側面から計測した。今後は自己評価の測定方法の検討を重ねていかなければならないと考える。また、母親の自己評価には父親に対する思いや評価が影響を与えていると報告されている²⁾。育児のパートナーである母親との関係や母親の父親に対する評価等の検討をも加え、父親の自己評価を高める取り組みについての考察を深めていく必要がある。

ま と め

1歳6か月児をもつ父親210人を対象として、父親としての自己評価と父親の育児参加状況や生活状況の関連を検討した結果、以下のことが明らかになった。

父親としての自己評価得点との間で有意な差が認められた項目は、①「抑うつ症状」、②育児や夫婦にかかわる時間のうち「平日に誰かと子供の相手をする時間」、「平日に夫婦で会話する時間」、③育児参加に対する認識のうち「育児にかかわる時間」、「育児に対する熱意」、④父親の生活上のストレスのうち「育児が思うようにいかない」、「親としての自信がもてない」、「妻との会話が不足している」、「仕事が思うようにいかない」であった。

文 献

- 1) 岡本編子：父親の育児行動と育児意識に関する研究。吉備国際大学保健科学部研究紀要，9，55-62，2004。
- 2) 金井幸子：乳幼児期の子どもをもつ母親の自己評価と夫に対する評価。小児保健研究，62(5)，552-557，2003。
- 3) UFJ総合研究所：子育て支援策等に関する調査研究報告書，2003。
- 4) 「家庭教育研究第4回白書 現代の父親と子育て ―父親の育児意識と母親とのパートナーシップについて―」，ソニー教育財団ホームページ，<http://www.sony-ef.or.jp/eda/study/committee/hakusho04.html>，2005。
- 5) クリストフ・アンドレ，フランソワ・ルロール：自己評価の心理学。高野優訳，第7版，紀伊國屋書店，東京，2004。
- 6) パードウィック：女性心理。今井欣悦訳，初版，原書房，東京，173-219，1974。
- 7) 川上憲人：職場における自己評価式抑うつ尺度の妥当性について。産業医学，28，360-361，1986。
- 8) 宮地文子，山下美根子，渡辺良恵，関美雪：初妊婦および3～4か月児・保育園児の母親の抑うつと関連要因。日本地域看護学会誌，3(1)，115-122，2001。
- 9) 宮地文子，武田文，野崎貞彦：3歳児の母親における精神健康と健康生活習慣の要因。日大医誌，57(7)，319-326，1998。
- 10) 高倉実，平良一彦，新屋信雄，三輪一義：高校生の抑うつ症状の実態と人口統計学的変数との関係。日本公衛誌，43(8)，615-623，1996。
- 11) 矢澤澄子，国広陽子，天童睦子：都市環境と子育て。初版，勁草書房，東京，82-86，2003。
- 12) 武田文，宮地文子，山口鶴子，野崎貞彦：産後のソーシャルサポート。日本公衛誌，45(6)，564-571，2000。
- 13) 厚生労働省：厚生労働白書(平成10年版)。初版，ぎょうせい，東京，88-91，1998。

- 14) 前田正子：子育てしやすい社会．初版，ミネルヴァ書房，東京，26-32，2004．
- 15) 厚生労働省：厚生労働白書（平成15年版）．初版，ぎょうせい，東京，97-101，2003．
- 16) 高橋美砂子，成田富貴子，佐藤ヨシ：共働きの父親の育児家事行動の実態と役割との関連．第29回母性看護，121-123，1998．
- 17) 岡本絹子：親子クラブに属する母親の育児状況と育児不安．川崎医療福祉学会誌，18(2)，325-332，2003．
- 18) 岩田裕子，森恵美，前原澄子：父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因．日本看護科学会誌，18(3)，21-36，1998．
- 19) 河合隼雄：対話する人間．第4版，講談社，東京，210-211，2004．

(平成17年6月10日受理)

Factors Related to Self-evaluation as a Parent by Fathers of 18-month-old Children

Kinuko OKAMOTO

(Accepted Jun. 10, 2005)

Key words : father of 18-month-old children, self-evaluation as a father, spousal communication

Correspondence to : Kinuko OKAMOTO Department of Nursing, School of Health Science
KIBI International University
Takahashi, 716-8508, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 265-270)